

道路開発で

あらわれた遺跡展VI

— 南国安芸道路建設に伴う
発掘成果から —

2012年度企画展2

県下初の弥生時代の堰跡

今回の「道路開発であらわれた遺跡展VI」では、南国安芸道路建設に伴って発掘調査した遺跡の内、整理作業が完了し報告書が刊行された花宴遺跡、徳王子前島遺跡、口槇ヶ谷遺跡から出土した遺物と調査した遺構写真などを展示し、調査成果及び地域の歴史について解説しています。

南国安芸道路は高知南国道路に接続して南国市から安芸市を結ぶ一般国道55号の自動車専用道路で、工事路線には多くの遺跡が所在します。

今回紹介する花宴遺跡からは弥生時代各時期の自然流路が確認され、多数の弥生土器と共に木製品が出土しています。遺物では全国的にも珍しい木製の威儀具、遺構では県内初の堰跡が発見されています。徳王子前島遺跡からは古代の祭祀遺物である人形や斎串など県内では出土例の少ない遺物が出土しています。また、口槇ヶ谷遺跡では古代の官衙関連の建物跡などが確認されています。

工事区域内にはこれらの遺跡以外にも東野土居遺跡、徳王子大崎遺跡、徳王子広本遺跡、坪井遺跡が所在し、発掘調査が行われ、現在整理作業中です。報告書が刊行された際にはその成果を公表する予定です。

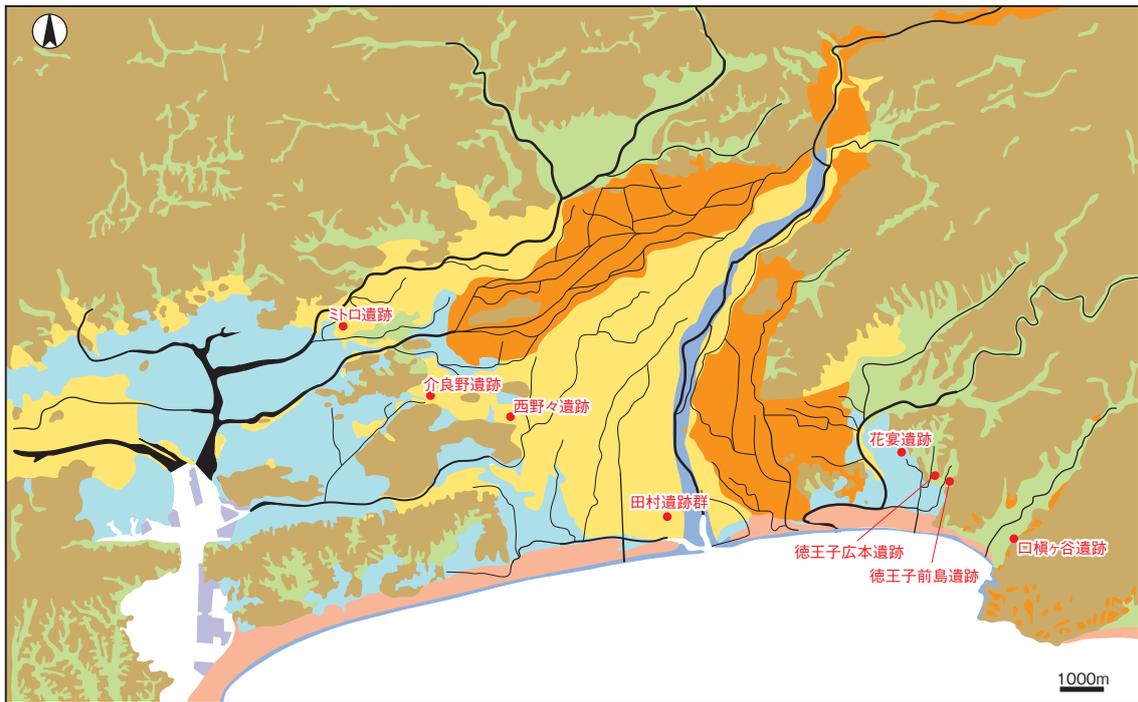


関連遺跡と古環境

花宴遺跡は香宗川左岸の三角州平野に所在し、後背湿地の様相を呈していますが、遺構が形成された弥生時代には、自然流路や自然堤防が形成され、相対的に乾燥した土壌環境が形成されていたとみられます。確認された遺構は自然流路およびそれに関連すると考えられる遺構で、弥生時代前期中頃から終末までみられます。徳王子前島遺跡は花宴遺跡の東方の小規模な扇状地と大留川の谷底低地部に立地しており、弥生時代後期の自然流路の出現から人の痕跡が確認されます。口槇ヶ谷遺跡は山地斜面基部の崖錐(急傾斜地などから剝離した岩屑類が下部斜面に堆積してできた地形)上および更新世末期頃までに形成され、その後段丘化したと考えられる沖積錐(やや傾斜が急な扇状地)とその沖積錐を再浸食して形成された開析谷からなる地形上に立地すると考えられます。

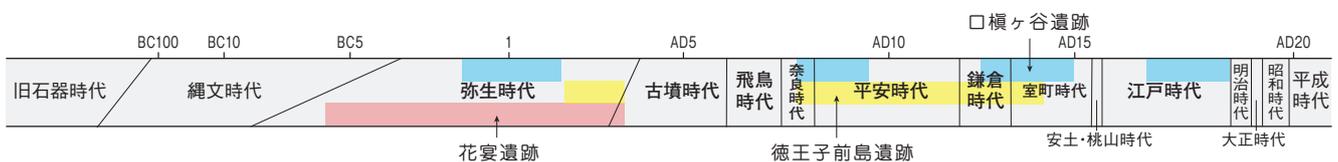


① 南国安芸道路関係の遺跡位置図(S=1/25,000)



凡例
 丘陵・山地斜面 台地 沖積扇状地・自然堤防 三角州平野 氾濫原 浜堤・砂礫州 河原・砂浜 埋立地 流路・水路
 (高知県,1966の一部を改変して作成)

② 香長平野の地形と遺跡の立地



③ 関連遺跡年表

花宴遺跡

花宴遺跡は、平成16年度から実施した香我美地区の試掘調査によって新たに発見された遺跡で、平成17・18年度に発掘調査が行われました。調査の結果、弥生時代の自然流路6条を中心に水辺の祭祀跡などが確認されました。中でも、IV区で検出した自然流路(SR-5)からは木製の威儀具いぎぐ、SR-5の上面で検出した自然流路(SR-6)からは県内初となる堰跡せきあとが検出され、貴重な資料を提供しています。

自然流路の出現

自然流路が形成される時期は、壺や甕に施されたへら描沈線がきちんせんから弥生時代前期の中葉と考えられます。最初に形成されたのは出土遺物からSR-2とみられ、SR-4とSR-5もほぼ前後して形成され、その後SR-1が形成されたと考えられます。SR-2の埋没後にSR-3が形成されますが、出土遺物を見る限り存続期間は短く、弥生時代中期中葉を中心に、中期後半には至らないとみられます。この時期までにSR-1～4はすべて埋没しています。



④ 弥生土器(壺・甕)



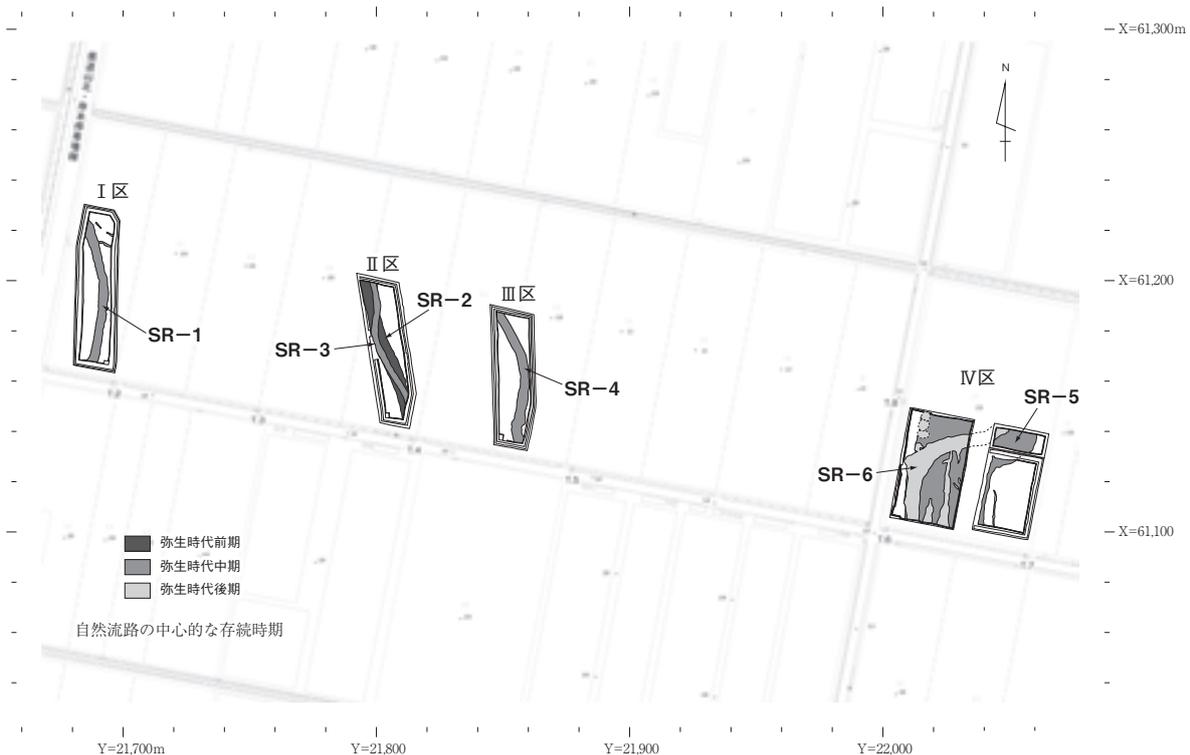
⑤ 弥生土器(甕)



⑥ 弥生土器(甕)



⑦ 弥生土器(甕のおこげ)



⑧ 自然流路位置図(S=1/3,000)

自然流路の変遷

SR-1, SR-2, SR-4の間には、検出面に一定の比高差がみられます。このことは、緩斜面が漸次的に繋がっていたのではなく、その間に自然堤防が形成されていたものと考えられます。

SR-5はSR-3と検出面がほぼ同じ標高で、他の自然流路に比べ6倍以上の規模を誇り、存続期間が最も長く、ほぼ弥生時代を通じて機能しています。SR-6はSR-5の埋没後に形成されています。注目されるのは最も新しい出土遺物に大きな時期差は見出せないことです。換言すれば、SR-6は、SR-5の埋没後、ほぼ同時、場合によっては同じ洪水によって形成され、短期間の内に埋没したものと考えられます。SR-6には短期間にせよ、堰が構築され、治水がなされていたことは事実であり、集落の営みが続いていたことが分かります。しかし、それも長くは続かず、^{たびかさ}度重なる洪水により埋没し、機能を失ったものとみられます。堰跡付近を中心に、木製品や部材などの木材が散乱しており、多くは上流部にあったであろう集落から流出したのではないのでしょうか。

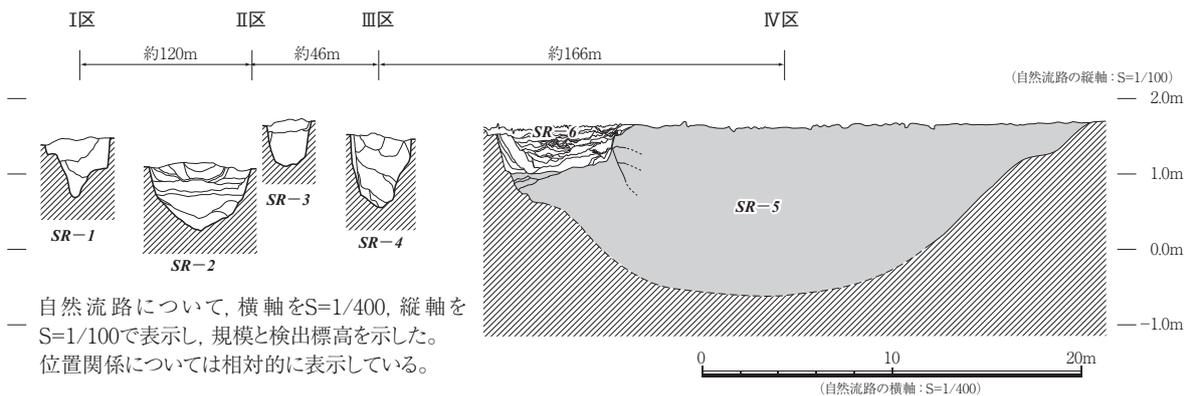
これ以降、周辺部では6世紀後半まで人の痕跡を確認することができません。



| | 弥生時代前期 | | | | 弥生時代中期 | | | | 弥生時代後期 | |
|------|------------------------|-----------|-------|------------------------|------------------------|-----------------------|-------|-----------|--------|----------|
| | 中葉 I様式 (中) | 後半 (新) | | 前半 II様式 | 中葉 III様式 (古) (新) | 後半 IV様式 (古) (新) | | 前半 V様式 | 後半 | |
| | BC700 | BC600 | BC500 | BC400 | BC300 | BC200 | BC100 | 0 | AD100 | AD200 |
| SR-1 | | | | BC330~203 BC330~184 | | | | | | |
| SR-2 | BC785~417 BC754~414 | | | | | | | | | |
| SR-3 | | | | | BC380~182 BC374~180 | | | | | |
| SR-4 | BC780~480 | | | | | | | | | |
| SR-5 | | | | | | | | | | |
| SR-6 | | | | | | | | | | AD66~233 |

グラデーションは自然流路の相対的な存続時期を示し、年代は放射性炭素年代測定の結果を記入

16 自然流路の変遷



17 自然流路の規模と検出標高

堰の構築と廃絶

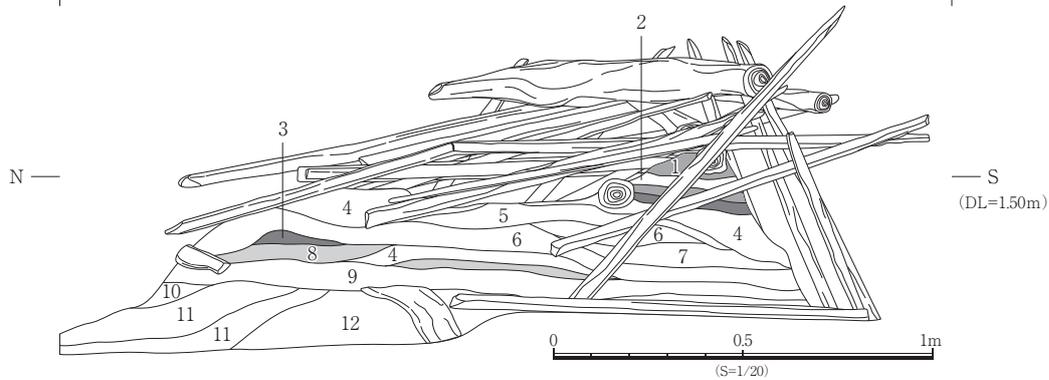
堰跡はSR-5が埋没した後、ほぼ同時に形成されたとみられるSR-6で検出されました。つまり、SR-5の埋没とSR-6の出現と廃絶は弥生時代後期後半から終末の**はんちゅう**で捉えられます。堰は西南西に延びた後、屈曲して南に方向を変える変化点に構築されていました。復元全長は約9.20mで、3ブロックに分けて構築されたものとみられます。堰の構造は、松山市古照遺跡と同じく縦・横・斜めに複雑に木材を組み合わせた**こでらいせき**合掌堰とみられ、当時の土木技術のレベルの高さを**うかが**うことができます。一方、使用された木材は、**かんがいしせつ**農用の灌漑施設であったものと考えられます。



18 木製品(鉏) 19 木製品(三又鉏) 20 木製品(杵) 21 木製品(横楯)

X=61,127.91
Y=22,013.82

X=61,125.64
Y=22,013.25



遺構埋土

1. 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト
2. 暗灰黄~黒褐色(2.5Y3.5/2)細粒~粗粒砂
3. 暗灰黄~黒褐色(2.5Y3.5/2)極細粒~細粒砂混じり黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト
4. 1cm厚の黄灰~暗灰黄色(2.5Y5/1.5)細粒砂が層状に堆積する極細粒砂混じり黒褐色(10YR3/1)シルト
5. 細粒中礫を多量に含む黒褐色(10YR3/2)シルト質極細粒~細粒砂
6. 極細粒~細粒砂混じり黒褐色(2.5Y3/2)シルト
7. 黒褐色(2.5Y3/2)シルト質極細粒~細粒砂
8. 極細粒~中粒砂混じり黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト
9. 黒褐色(2.5Y3/1.5)極細粒~中粒砂混じり中粒中礫
10. 黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粘土
11. 黒褐色(2.5YR3/2)シルト質粘土混じりの粗粒中礫
12. 2cm厚の黄灰~黒褐色(2.5Y3.5/1)極細粒砂が層状に堆積する砂混じり黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト

22 堰跡断面図

水辺の祭祀

県内では弥生時代中期末ないし後期初め頃から古墳時代後期にかけて、河川の近くで土器などを用いた祭祀が行われており、水辺の祭祀と捉えられています。これらの祭祀は大きく8類型に分類でき、今回検出された3カ所の祭祀関連遺構はその中で最も初現的な形態である土器のみを用いた祭祀に分類されます。この形態は古墳時代になっても続き、6世紀後半まで続きます。この時期のものは、甕を主体とし、鉢も伴出することから煮炊きを行い、神へのお供えと直会(共飲共食儀礼)の痕跡とみられ、検出したいずれの遺構からも土器と共に炭化物、焼土、河原石がみられ、**すす**煤が付着する甕も出土しています。範囲は明確ではないものの、円形状を呈しています。

河原石を伴うことも多く、「自然石」に対し、特別な意味合いがあったものとみられます。すなわち、神の依代となり、「磐座」といった神が降臨してくる場所であったものと考えことができ、弥生時代後期後半から終末頃には河川祭祀が盛んに行われていたものと推察されます。



23 弥生土器(甕)

24 弥生土器(甕)

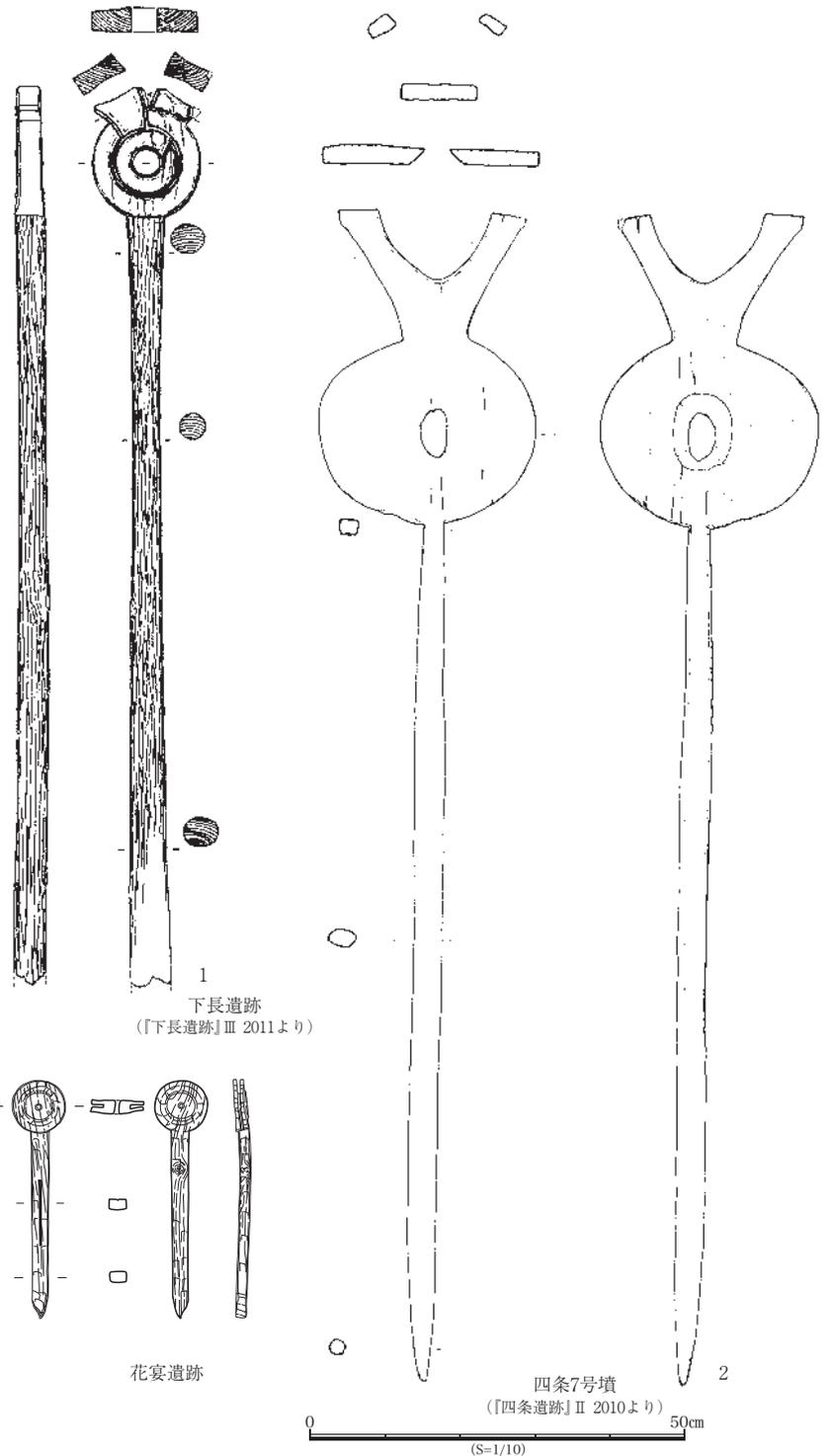
SR-5から非常に稀な木製品が出土しました。類例が儀杖形木製品の中にみられ、**26**に類例を掲載しました。この中で、守山市下長遺跡のもの(**26**の1)に類似点がみられます。まず、棒軸部の先端である頭部に円環状の飾りを作り出している点を挙げることができます。さらに、二重円を彫刻している点も指摘でき、本例にはさらに頭部周縁に深さ2.1cmの溝を彫込んでおり、先の例より精緻な細工をしているともいえます。しかし、**26**の1・2には角状突起と言われる二股に分かれる飾りが頭部に作り出されているが、本例にはみられません。また、本例には軸部に当たる柄に長さ8.7cm、幅1~3mm、深さ2~2.5mmの溝が彫込まれているが、先の2例にはみられません。そして、最も大きな相違点として指摘されるのが長さです。本例が全長31.8cmであるのに対し、**26**の1が116.5cm、**26**の2が157.2cmで、杖と表現できますが、本例は杖とは言いがたいものです。一方、先端部に類似性が認められます。すなわち、**26**の2や儀杖形木製品の中には先端が尖ったものがみられる点です。それらは地面に突き刺していたものと考えられており、本例もそのように使用された可能性があります。ただ、地面に突き刺すには短過ぎるように思われ、形式的に先端を尖らせ、実際は手に持って使用したのではないのでしょうか。

これらはいずれも古墳時代以降のものであり、弥生時代に遡るものはなく、威儀具の系譜を探る上で重要な資料です。

また、「威儀具は儀礼や祭祀の場で、首長が手にし、身に帯びることによって、首長の権威を参集者に知らしめるための道具立て」(樋上 2006)と言われます。そのようなものを持った人物が弥生時代後期後半から終末にかけてこの徳王子周辺に居たことになり、今後花宴遺跡に伴う集落のあり方を考えていく上で欠くことのできない資料となっています。



25 木製品(威儀具)



26 儀杖形木製品と花宴遺跡出土威儀具

徳王子前島遺跡

徳王子前島遺跡は小規模な扇状地と大留川の谷底低地部に立地しています。

弥生時代では調査区西部で自然流路が検出されています。その他に当該期の遺構は検出されていませんが、古代～中世の遺物包含層からは当該期の遺物が出土し、さらに、農具とみられる木製品や石庖丁などが出土しており、周辺部で耕作を行っていた可能性が考えられます。

古代から中世では、自然流路が2条検出されました。8世紀後半から12世紀の遺物を含む自然流路からは、人形や斎串などの祭祀遺物や墨書土器、さらに完形の土師質土器など律令期とみられる遺物が出土しており、官衙等の管理下にあったものと考えられます。この自然流路に隣接して畦状遺構など耕作に伴うとみられる遺構や足跡も検出しており、当地で耕作を行っていたことがわかります。また、珍しいものとして木鏝の出土を挙げることができます。これも儀式などの祭祀に使用された可能性が考えられます。

13世紀から14世紀の遺物を含む自然流路からは、多くの軒丸瓦を含む瓦片が出土しており、周辺に寺などの瓦葺建物が存在した可能性が考えられます。また、建物跡などの遺構は認められなかったが、土器量から当遺跡周辺に集落が存在した可能性が考えられます。



27 木製品(木鏝)



28 木製品(斎串)



29 土師質土器(杯)



30 土師質土器(椀)



31 土師器(高杯)



32 瓦(軒丸瓦)

口楨ヶ谷遺跡

口楨ヶ谷遺跡は夜須川左岸の山地斜面基部の崖錐上および更新世末期頃までに形成され、その後段丘化したと考えられる沖積錐とその沖積錐を再浸食して形成された開析谷からなる地形上に立地するとみられます。

弥生時代には調査区中央部に谷水が流れ込む形になった溜池状遺構がみられます。その他に当該期の遺構は検出されていませんが、古代～近世の遺物包含層からは当該期の遺物が出土しており、集落が存在した可能性が考えられます。

古代では隅丸方形の掘方を持つ柱穴で構成される掘立柱建物跡が計3棟確認されており、掘方の形状から官衙に関連する建物跡と考えられます。また、当該期の遺構は尾根状の高まり部分から南西方向に下る緩斜面上で多く確認されていますが、弥生時代と同じく後世の削平を受けており、遺存状態はあまり良くありませんでした。

中世・近世では調査区全体で柱穴、土坑、溝状遺構などが検出されています。中世における集落の中心は調査区東側に所在する尾根状の高まり部分とみられ、この箇所を中心に当該期の遺構が多く確認されています。また、近世では調査区全体で遺構が検出されており、比較的広範囲に集落が展開していたものと考えられます。



33 瓦器(椀)



34 瓦器(椀)



35 土製品(土錘)

その他の遺跡

南国安芸道路関係では、① 南国安芸道路関係の遺跡位置図(S=1/25,000)に示したとおり、これまでに7遺跡の調査を実施しています。今回紹介した遺跡以外は、現在整理作業中です。ここでは、それらの遺跡の概要について紹介したいと思います。それぞれの遺跡が香南市ひいては高知県の歴史解明に重要な意味を持っており、中でも遺跡範囲の最も広い東野土居遺跡からは各時代の注目される遺構が確認されています。

東野土居遺跡

香南市野市町東野から土居にかけて所在する遺跡で、平成21年度から本格的な発掘調査を実施し、平成23年度で調査は終了しました。

遺跡は香宗川西岸に広がる古期扇状地である野市台地上に立地しており、その範囲は東西約1,150m、南北約380mと広範囲に互^{わた}ります。

発掘調査では100軒以上の弥生時代から古墳時代の竪穴建物跡を始めとして古代、中世、近世に至る多数の遺構と遺物を検出しました。中でも香宗我部氏^{こうそがべし}と関係が考えられる館跡は注目されます。



③6 館跡完掘状態

徳王子大崎遺跡

平成17年度に実施した試掘調査によって確認された弥生時代と中世の複合遺跡で、北から延びる丘陵上に立地します。北側からは区画溝を伴う中世の屋敷跡およびピット群を検出しました。出土遺物は少ないものの、石鍋や備前焼の甕片などが出土しており、15世紀代の遺構とみられます。南側からは、弥生時代前期前半の土坑と弥生時代後期のベッド状遺構を備えた竪穴建物跡、中世の溝状遺溝を検出しています。



③7 遺構検出状態

徳王子広本遺跡

徳王子大崎遺跡の東側の丘陵上を中心に立地する弥生時代、古代から中世の集落遺跡です。平成19・23年度に発掘調査を実施しており、西側の低地部分では、上層から中世の掘立柱建物跡や溝跡、下層から弥生時代の土坑や祭祀関連ではないかとみられる土器や石器、木製品を含む幅約4m、延長約20mの集石が検出されています。一方、東の丘陵上からは弥生時代の土坑、古代の掘立柱建物跡と溝跡、中世の溝に囲まれた屋敷跡などが確認されています。



③8 遺構完掘状態

坪井遺跡

夜須川西岸の低位段丘と沖積平野に立地し、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が確認されています。

この内、古墳時代では一辺約3.5～4mを測る3軒の隅丸方形の竪穴建物跡や祭祀関連遺構が確認され、古代では、掘方が方形の掘立柱建物跡が2棟、布目瓦、円面硯^{ぬのめがわら えんめんけん}が出土しており、寺院もしくは官衙関連施設の存在が想定されています。また、中世の掘立柱建物跡も3棟検出されており、古墳時代から中世にかけて集落が断続的に存在していたものとみられます。



③9 遺構完掘状態